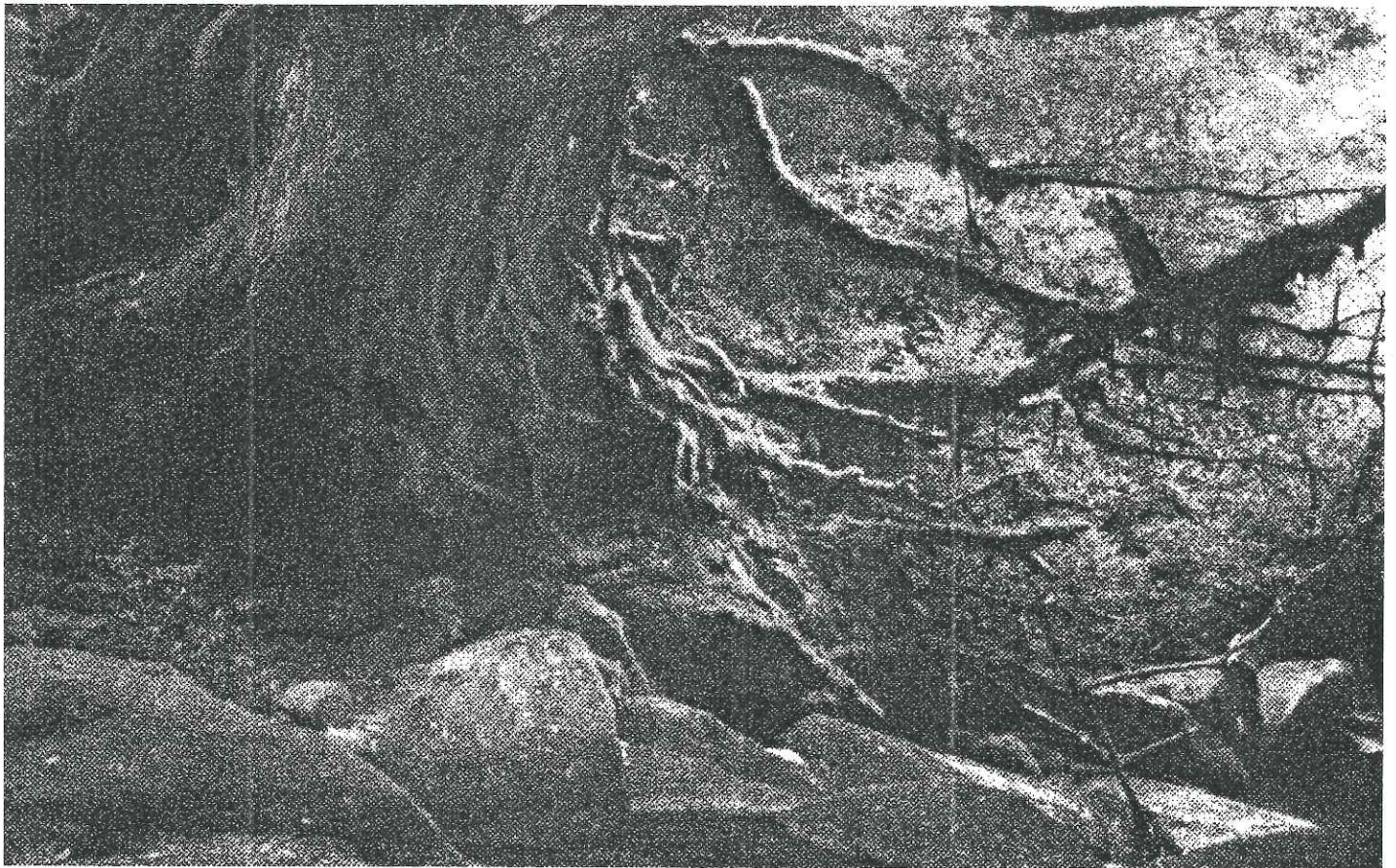


Y-NAC 通信

リ イ ナ ッ ク つ う し ん



第四号
1996年7月1日
発行



屋久島の子供たちが 夢を描くとき

代表取締役

松本 毅

私が小学生の頃、カレンダーや
広告の裏によく夢の未来都市の
絵を描いたものだ。その未来都市
とは、超高層ビルが立ち並び、ビ
ルの合間を立体高速道路が網の
目のように走っている。空には超
音速旅客機、その上には人工衛
星、宇宙ステーション。そのころ
はとても実現できるとは思えな
い夢の未来都市だった。

それから二十年後、東京にはま
さしく小学生の自分が描いてい
た未来都市そのものがあつた。そ
の現実となった未来都市とは、ま
さしく当時の大人達の夢そのも
のだったのではないだろうか。敗
戦後のぼろぼろの日本から立ち
上がり、ようやく豊かな日本をめ
ざし始めた時であり、日本全体が
自己を捨てて必死になって働き、
高度経済成長の中で多くの矛盾
にも目をつむり、豊かな日本を築
くようがんばる、そのために大人
達に必要な夢だったのではと思
えてくる。そして、その夢をめざ
して遮二無二に働く大人達の背
中から小学生の我々にまでその
夢は深く浸透していたのではな
いだろうか。そして、日本全体が
その夢を持ち続けられ、とても実
現できないと思っていた夢が本

当に実現できてしまうのだと。最
近、そんな風に思えてきた。

今屋久島の子供達はどんな屋久
島の未来を思い描いているのだ
ろうか。先日、屋久島の子供達の
文集を読んでいて気づいた。子供
達が屋久島のことを書いたもの
のほとんどが環境問題を扱った
ものだった。つまり、今の大人達
が環境悪化をたいへん懸念して
いることの反映なのである。さ
て、これでは屋久島の子供達が明
るい夢を見ることはできないの
ではないだろうか。屋久島の大人
達は今抱える問題の処理に追わ
れて、二十年後、三十年後の屋久
島に明るい夢を見る暇もなくな
ってしまっていないだろうか。

世界遺産登録という屋久島の
大きな転機に、今こそ屋久島の
大人達が屋久島の未来についてケ
ンケンゴウゴウの議論を戦わせ、
試行錯誤を繰り返して、動き出す
ときがきたのである。世界の遺産と
ない斬新な発想とこれまで数
多くの失敗から学び、新しい屋久
島のビジョンを作り出すときが
きたのである。そして、屋久島全
体が大きなビジョンに基づいて
動き出すとき、子供達にも知らず
のうちに行き渡り、カレンダーや
広告の裏に屋久島の明るい未来
像を描き始めるのである。

白谷雲水峡の
蘚苔類群落

小原 比呂志
おばら ひろし

はじめに

「屋久島の森」この言葉を聞いてまず頭に浮ぶのは、ヤクスギの巨木やヤクスギルなどの樹々が鬱蒼としたちならび、樹幹や林床をしっかりと緑のコケ・蘚苔類が覆い尽くす、そんな風景だろう。

豊富な雨に育まれる蘚苔類の、厚いマットに蓄えられた水は森を穏やかに潤おし、豊かな溪流を生み続ける。この蘚苔類のマットはヤクスギやヤクスギツツジなど多くの樹種にとって文字どおり必要不可欠な発芽床でもある。また雨に濡れた蘚苔類がそれ自身非常に美しいものであることは、心算しく雨の森を歩いたことのある人には説明不要だろう。

かのウエルソン博士に「隠花植物の王国」と言わしめただけあって、屋久島の蘚苔類は古くから比較的よく調べられており、蘚類・苔類ともに分類学的にはほぼ明らかにされている。

しかし蘚苔類の種の同定はごく一部ののはっきりした特徴をもつ種以外はとでもめんどうで、専門家以外の人にとつてはあるコケの名前を知ることすら非常に難しい。また国内では生態学的な研究がほとんど行われてい

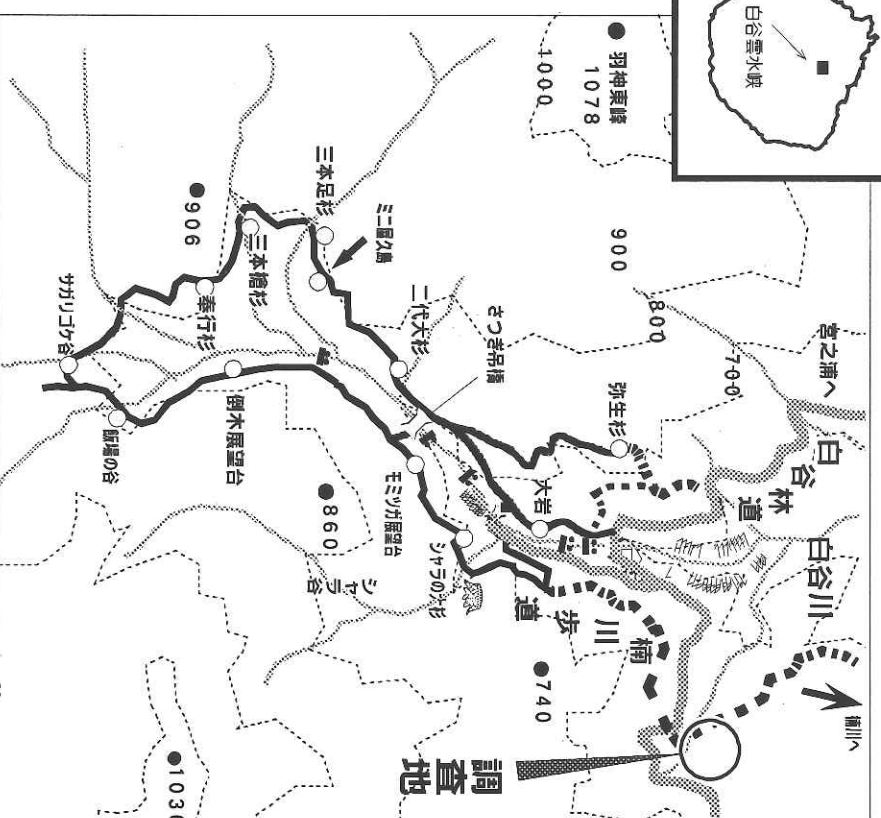
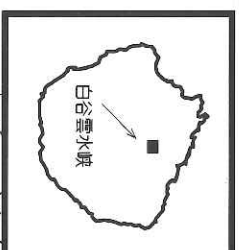


図1. 白谷雲水峡 調査地の位置

ないため、森林生態系のなかで水や栄養塩類の循環に果たす役割もよくわかっていない。

つまり屋久島で白谷雲水峡の森へゆき、そこで素晴らしい蘚苔類の群落に出会っても、漠然とした話以外には、確かなことがほとんど誰にも何も(種名すら)わからない、というのが

現状なのである。基本的なことがある程度きちんと理解されていないければ、たとえ何か重要な変化があったとしても、よくわからないまま放置される

しかない。
1983年と1996年に白谷雲水峡で苔類の調査をされた古木達郎氏(千葉県立中央博物館)は、13年

前には豊富に生育していた「葉上苔類」~常緑樹などの葉の上に生育する苔類~が姿を消していることを指摘している。そつと話す話ではないか。

そんなわけでややぞつとしていた著者は、1995年10月から白谷雲水峡で蘚苔類の調査研究を行っている。本稿ではそのなかから群落に関する知見をまとめてみたい。

なお調査にあたっては、林野庁屋久島森林環境保全センターのご協力を頂いた。
深く感謝する次第である。

調査方法

第1次の群落調査は、1996年5月24日から6月4日にかけて楠川歩道の標高630m、仮称小屋跡谷周辺を選んで行った(図1)。調査地は20mほど離れて平行に流れる2本の沢に挟まれた、おそらく古い土石流の堆積によってできた平坦地上の照葉樹林で、林冠は閉じているが周囲に比ベヤクスギオナガカエデやスギなどの陽樹が多く、樹齢も若いものが多い。飯場の跡地らしきものが見られるので、白谷山荘の周辺と同様に昭和初期に何らかの形で伐採が行われた可

能性もある。蘚苔類の生育状況は、周囲に比べて良好だが、フロラはやや単調な印象を受ける。

辻峠などの湿原状群落を除けば、白谷の森林の地表で蘚苔類がまとまった群落をつくる場所は、岩・樹・ヤクスギ切株などの安定した固い基質の上か、または垂直に近い土面に概ね限られる。反対に降雨時の表面流に浸食されたり、その際に流動する大量の落葉に攪乱されたりする腐植土面に蘚苔類はほとんど見られない。そこで調査地の生育基質を仮に7つのタイプ(①ヤクスギ切株、②ヤクスギ半切株、③花崗岩転石、④平坦地、⑤傾斜地、⑥広葉樹(ヤクスギ・カシ)樹幹、⑦深溪流沿いの転石)に分け、各基質の代表的な箇所を選んで2m~6mのライオンをひき、ライオン上に出現する群落を記録した。またライオン上で特徴的な群落を数点選び10cm×10cmのコドゥート方形枠を設置して採集した。その際着生植物の根や腐植等を含め基質上にある物はすべて採取した。土面上の群落に関しては、コドゥートにそつとそつと引き抜き、仮根に無理なく付いてくる腐植ご

と採集した。

今回の調査では樹上高さ2m以上に着生する群落に関しては対象としなかった。

サンブルは研究室に持帰り、ソーテイング(仕分け)して、種を同定し、風乾したのち計量した。

また補足実験として、現存量が比較的多い6種について、風乾したサンブル1.0gずつを30分間水道水に浸したのち湿重を計り、吸・保水量を測定した。

結果と考察

7本のライオンに対して10cm×10cmコドゥートを計27区画設置し、2700cmのコドゥートサンブルを得た。

①蘚類と苔類の出現比率
全コドゥート中に出現した種の一覧を表1に示す。未同定のものを含めて21種中、蘚類16種(76%)、苔類5種(14%)。また一応の指標として全サンブル中の蘚類と苔類との

表1. 調査ライオン上に出現した蘚苔類リスト

和名	学名	切株		幹上		転石		平坦地		斜面		土の		ヤクスギの	
		+	○	+	○	+	○	+	○	+	○	+	○	+	○
カササギ	Pogonatum spurio-cirratum														
カササギ	Fissidens japonicus														
カササギ	Leucobryum scabrum	+													
カササギ	Plagiomnium maxillare														
カササギ	Rhizogonium dozyanum														
カササギ	Rhizogonium spiriferum badakense														
カササギ	Hemaliodendron scalpellifolium														
カササギ	Distichophyllum malherae														
カササギ	Thuidium glaucinum														
カササギ	Eurhynchium arbuscula														
カササギ	Taxidiphyllum taxiferaeum														
カササギ	Brotherella henonii														
カササギ	蘚類の1種														
カササギ	蘚類の1種														
カササギ	蘚類の1種														
カササギ	蘚類の1種														
カササギ	Trichocolea tomentella	+													
カササギ	Bazzania tridens														
カササギ	Bazzania japonica	+													
カササギ	Odontoschisma dendatum	+													
カササギ	Judua japonica														

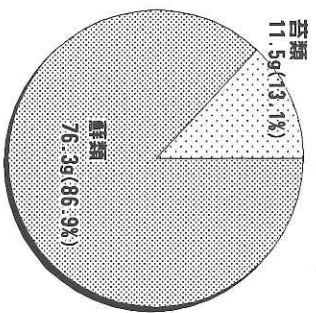


図2. 27コドラー(2700cm²)中の 蘚類・苔類の重量比(風乾重)

重量をそれぞれ合計したものを比較してみると(図2)、蘚類76.39(86.9%)、苔類11.59(13.1%)となり、森林内部の地表では圧倒的に蘚類が優先している傾向が伺われた。

一般的に蘚類は比較的乾燥に強く、苔類は弱いとされており、この結果は湿っぽいと思われる照葉樹林の林床部が、以外に乾燥に見舞われる環境であることを示していると思われる。蘚苔類の水分要求に関して資料が揃えば、森林内の環境評価の指標として使えるかも知れない。

②群落と基質タイプの関係

調べた全ライソンの模式図を図3-a~図9-aに、またライソングートの各コドラー中の現存量を図3-b~図9-bに示す。

切株と樹幹

図3のヤクス半切株は、切口以外のほとんど全面をヒロハヒノキゴケに覆われている。切株の表面の腐植のぼるぼる具合、あるいは酸度がヒロハヒノキゴケの仮根の生育にちよよいいかも知れない。図4のヤクス半の幹の基部も同様であり、これも古くなった表皮の溝と風化の具合が良かったかもしれない。しかしこの種と、普通セツトで出現するカガミゴケとが他の樹種の倒木や根元を大規模に覆う例はあまりない。例えば近くのアナカエダ(図8)の樹幹はキアリナギゴケやキタチヒラゴケなど第一次茎がつる状に匍匐する種が優先している。スギの樹幹流は酸性化し、ブナの樹幹流はアルカリ化すると言われているが、樹種によって樹幹流のpHが変化するなどの特徴があるとするれば、蘚苔類は樹種の表皮のタイプとともに樹幹流の性質への好みによって分布を分けている可能性がある。

ヒロハヒノキゴケは屋久島にも分布するハリヒノキゴケの変種とされ、外観はそっくりだが雌雄異株となることで区別される。ヒロ

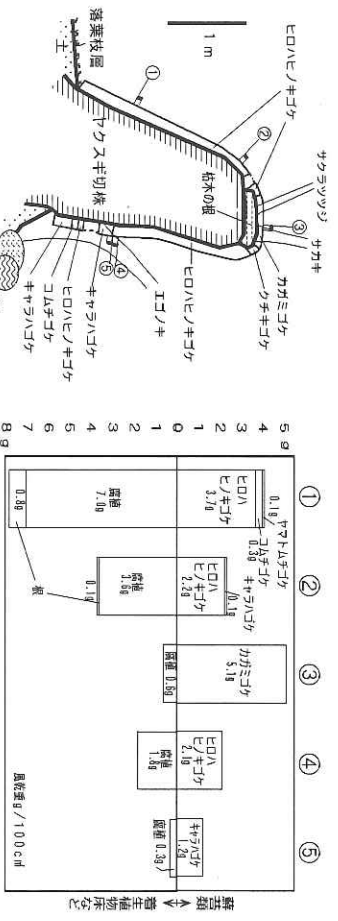


図3-a. ライソン1(3800cm²) ヤクス半切株上の蘚苔類

ハヒノキゴケは日本の照葉樹林帯から台湾、ジャワの標高2000~3000mに分布するが、ハリヒノキゴケとやはり変種のリュウキユウハリヒノキゴケはより熱帯要素が強いらしい。屋久島全島のヤクス半切株のほとんどはヒロハヒノキゴケ類の蘚類に覆われている。今回の調査では雌雄同体のハリヒノキゴケは採集できなかったが、ヒロハヒノキゴケと比較してどのような分布を示し、それがどうい

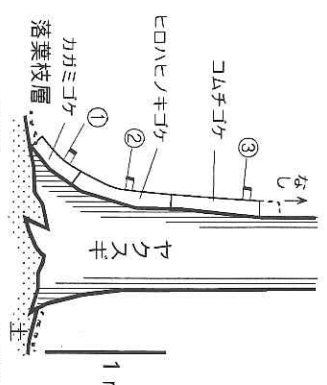


図4-a. ライソン2(2000cm²) ヤクス半樹幹上の蘚苔類

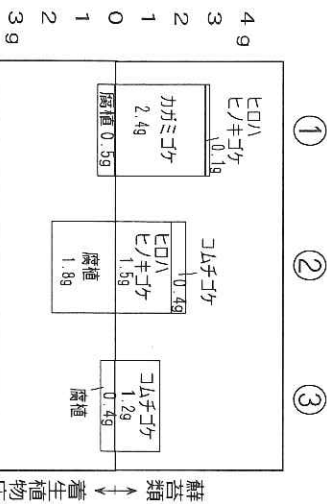


図4-b. ライソン2 各コドラーごとの現存量(風乾重)

雨をささぐり、浸食と落葉の堆積を防いでいる。ヒノキゴケもこのようにところに群落を作ることがある。これらの種にはある程度、腐植土壌の流出を食い止める力がある。

花崗岩転石

図5と図9は、花崗岩の転石上に成立する群落である。岩は蘚苔類にとつても最も安定した基質で、まあい岩の各部分の傾斜によって異なった群落が見られる。ライソン5では傾斜の緩い位置にヒロハヒノキゴケ、急な位置にコムチゴケというパターンが見られ、ヤクス半の樹幹に似ている。また垂直に近い急傾斜部にはキアラハゴケが特徴的である。しかし岩上蘚苔類のおもしろいポイントは、むしろマット状混成群落(complex)ではないかと思われる。これは要するにアオシノゴケ、ツルチヨウチンゴケ、ムクムクゴケ、

キアリナギゴケなど、つる性あるいは匍匐性の蘚苔類が、競走なのか共生なのか、ただ適当に生えただけなのかかわからないが、とにかくごちゃごちゃに絡み合い、つぎあって群落化しているものだ。現存量はせいぜい3~4g/100cm²とたいしたものではないが、ソーテイングには大変苦労した。外見状は屋久島などの海岸で見られる、海藻のマット状混成群落に似ている。

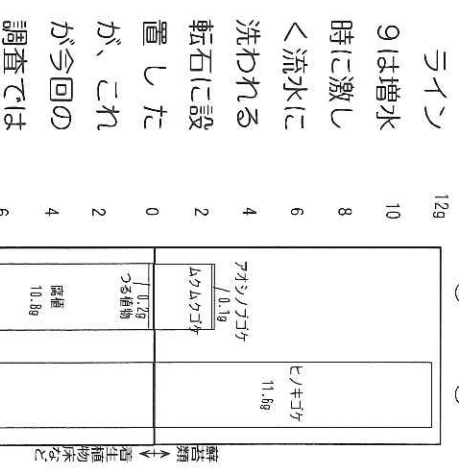


図6-b. ライソン4 各コドラーごとの現存量(風乾重)

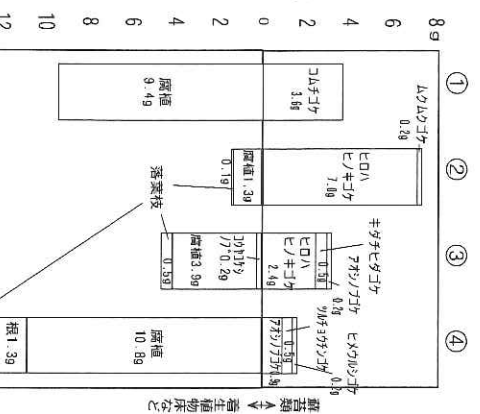


図5-b. ライソン3 各コドラーごとの現存量(風乾重)

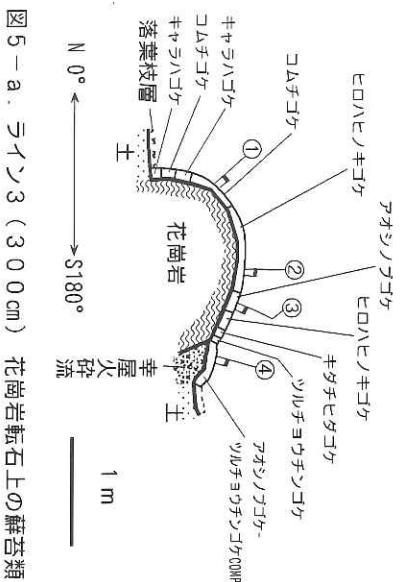


図5-a. ライソン3(3000cm²) 花崗岩転石上の蘚苔類

地面

図6のヒノキゴケと図7のホウライスギゴケは、白谷では比較的規模の大きい純群落を作る。ホウライスギゴケはジャイアントモスの屋久島版とも言えそうな島内最大の蘚類で、高さは13cmに及ぶ。ヒノキゴケは水を含むと子犬のような柔らかかな手ざわりとなり、最も美しい種のひとつである。この2種の単位あたり現存量は群を抜いて大きく、また仮根が抱える腐植の量も多い。いずれも安定した腐植上に生育する種である。

4月の新緑期から夏期にかけて、白谷雲水峡一帯の地表はアカガシとウラジロガシの膨大な落葉によって覆われている。観察によれば、これらの丈夫な葉は、雨のたびに地表を激しく攪乱する。ライソン4のヒノキゴケ群落は、荒れ狂う落葉の海から島のように

一見逆のようだが、急峻な土面は小尾根部分の末端である場合が多いので、表面流や流水路による浸食を受けずに済む。また雨の直撃浸食を受けることが少ないうえ、土面から直角に伸びるホウライスギゴケの長大な直立枝はちょうどわらび屋根のように

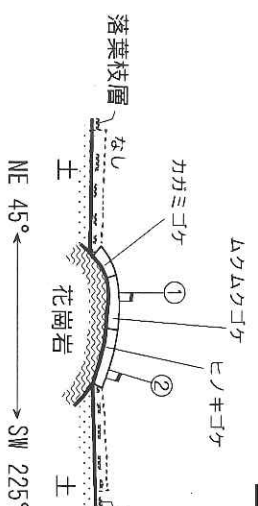
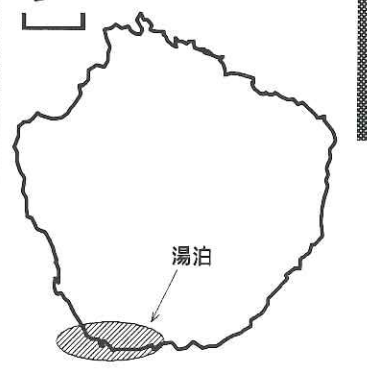


図6-a. ライソン4(3000cm²) 平坦な地面上の蘚苔類

Y N A C 特選

コースガイド

その④ 湯泊〜二賀野の浦「シーカヤック」



数年前まで屋久島を回る周回道路の延長は約一〇五kmといわれていた。なんでもまっすぐにしてしまつ、このところのすさまじいばかりの道路工事を見ていると、今、何キロあるのかはよく分からない。いずれにしても、島の中では、車ですつとぼせば二時間で元の場所に戻ってしまう。どんなに急いだところで、お釈迦様の掌の上の孫悟空のようなものである。

この掌から抜け出すためには、大海岸へと漕ぎ出さなければならぬ。屋久島の海岸線は凹凸が少なく静かな内湾がほとんどない。一漕ぎ港を出れば完全な外洋となる。東へ行けばロサンゼルス、西へ行けば上海、南へ行けばイリアンジャヤだ。そこにシーカヤックのロマンがある。

《コースガイド》
この沿岸部は、熊毛層群と呼ばれる堆積岩が、複雑に褶曲し、ズタズタに破壊された複雑な地形を示し、屋久島誕生時のダイナミックな地質変動の一端をかいま見させてくれる。特に大小の離れ瀬が多く、瀬と瀬の間を思い思いにすり抜けていく楽しみがある。また水の透明度も高く、グラスボート気分でも水中の魚やサンゴを眺めることもできる。

見所は二賀野の浦の四連洞窟。また帰りには湯泊の温泉で潮を流すのがたまらない。
北々北東の風の時は島陰となるが、南からうねりが来ているときは、あまり瀬には近付けない。

①湯泊港
港の最奥にスロープがあり、ここからエントリー、エキジツトを行う。ただし大潮の干潮時は、スロープの末端より水位が下がることがあり、多少乗り降りしづらいこともある。大きい

な港で、堤防も高いが、東風が強いときには、港の奥までもろに風が吹き込み、風波がたつこともある。店や電話は、県道まであがらなければならない。
②オーセンセット
港を出るとすぐに沖のオーセンとの間の水路を抜ける。このあたり堤防から撒餌をするせいか魚影が濃い。しかしあまり堤防近くを漕ぐと、上から石を投げられるかも知れないから、あまり堤防には近付かない方がいい。

③イワンマエ
海岸に岩屋(洞窟)がある。中は不明。
④クスクノハナ
奥の深い割れ目状の洞窟がある。狭いがカヌーで中に入れことができる。中では波音が大音となりこだまし、奥まで入る気にはならない。

⑤水路
離れ瀬の内側が水路のようになっていて、比較的波が静かになっている。
⑥ゴメイシノセト



港を出るとすぐに離れ瀬の多い岩礁地帯となる。



黒色の堆積岩に挟まれたゴメイシ (花崗岩)

不思議なことに堆積岩の割れ目に花崗岩がすっぽりとはさまっていることからこの名が付いた。波の静かな細長い水路で、最奥部で上陸可能。
⑦堆積岩の盛り上り

この部分だけ部分的に堆積岩が押し上げられたのか、地層が目茶苦茶に破壊され、瓦礫の山のようになっている。
⑧ニガナダケ

高さ5.2mある大きな離れ瀬。陸側は細い水路となっており、通行可能。但し最狭部のワタゼンクチは浅くて、干潮時には通れないこともある。
⑨二賀野の浦

小さな入江の奥は、屋久島では珍しい玉砂利の浜となっており上陸可能。

流木も多く、ここで焚き火をして昼食をとる。但しあまりいい焚き付けがないので、薪が湿っていると苦労する。入り江の奥に向かって右側には、きれいなサンゴが見られ、スノーケリングも楽しめる。またイソモノも豊富で、ビールのつまみとなる。
⑩旭の岩屋
二賀野の浦の西側には、四つの洞窟(岩屋)が並んでいる。昼食の後、一休みしたら洞窟探検にでかけよう。潮が満ちてくると足元が濡れる覚悟が必要だ。

第一の洞窟の手前には、岩の割れ目から小便小僧の小便のように水が吹き出している。そして洞窟の真前には高さ2m程の盛り上がった岩があるのだが、これが面白いことに岩の頂上から水がこんこんと湧き出ている。鉄分が多いためかオレンジ色をした藻類のようなものが流れに沿って付着している。温泉でないのが残念だが、沸かして入れれば身体によさそうな気がする。
第二の洞窟は、中にはいると天井部に穴があり、そこから水が滝のように落ちてきている。穴の上にはガジュマルが涼しげに枝を広げているのが見える。

第三の洞窟は、地面にコウモリの糞が落ちており、コウモリの休み場として利用されているようだ。
⑪湯泊温泉

シーカヤックの後にはやはり温泉に入って潮を流したいものだ。湯泊港から海岸を四〇〇mくらいいったところ

ろに海の見える露天風呂がある。地元の人湯泊集落が管理する温泉なので、地元の方が入っていたら断ってから入れさせてもらおう。桶や石鹸は持参しなければ置いていない。
《コースタイム》
ゆつくり漕いで片道2時間程度。場合によっては中間港へエスケープも可能。

湯泊〜二賀野の浦ルートマップ



屋久島

有象無象

テッポウエビは 小心者

「人間と自然の共生」などという今更にも思える言葉をよく耳にする。生物同士の共生関係が一〇年や二〇年ではとてもできるものではないのに、一方的に崩してきた関係を人間対全自然を相手に何をしようというのか。今言わなければならぬのは「人間の自然との信頼関係の回復」なのではないだろうか。

前置きはさておき、共生ハゼとテッポウエビの共生関係は観察していてもおもしろい関係である。テッポウエビの作る巣穴に用心棒として迎えられる共生ハゼ。せっせと穴を掘るテッポウエビの前であたりをうかがっている。共生ハゼは割とのんきに上を見上げているのに対してテッポウエビは共生ハゼのちよつとした心の動揺も見逃さぬようにいつも触角を共生ハゼに触れてびくびくしている。

「見ているとテッポウエビはいつも巣穴をブルドーザのように穴掘りをしている。何をそ



んなに穴の掃除をする必要があるのかと見ていると、ある時、テッポウエビが後ろの足を使って巣穴に一生懸命砂を落とし込んでるのだ。しばらく穴に隠るとまたせっせとブルドーザを始め。なるほど、巣穴に砂を落としてはこそそこそと巣穴で砂の中の有機物を食べているのだ。だから、ひっきりなしに砂を入れては出し、入れ替えては出しているのだ。はて、共生ハゼはいつ何を食べているのやら。

さて、ある時クビアカハゼとテッポウエビのコンビを見つけそつと上から近寄った。クビアカハゼが私に気がつく前にテッポウエビと私の目があつてしまった。テッポウエビは飛びあがらんばかりに巣穴に飛び込んだ。が、なんとあの小心者のテッポウエビ

がおそろおそろ顔を出した。私との距離がちじまっていたことを確認するとまだあさつての方向をのんきにみているクビアカハゼの尻尾をささみてちよいちよいと引張っている。「おい、危ないからもう中へ入れ。」と叫んでいるように見える。その仕草からは、恐ろしいのを必死で我慢してクビアカハゼに危険を知らせるテッポウエビのはりさけんばかりの心臓の音が聞こえてきそう。クビアカハゼが私に気づいた瞬間、飛び上がった巣穴に飛び込んでいった2匹の姿は、なんともほほえましく思えた。普段はこそそしているだけのテッポウエビのこの必死の行動に思わず拍手を贈ってしまった。共生と言つ以上、この位の覚悟というものが必要なのではないだろうか。

(松本)

タン

今年の1月、図らずも帯状疱疹にかかってしまった。右胸に神経痛のような痛みが走り、我慢ができなくなつて、医者に行った。症状を訴え、痛む右胸を見てもらつたところ、患部に発疹が出ていたのを見て、「帯状疱疹ですね。」と即座に診断を下された。続けて背中側の発疹をまじまじと見ながら「これはひどい。今までこんなにひどいを見たことない。どうしてこんなになるまでほつといたの。」とまて言われてしまった。そんなことを言

われても、こちらは帯状疱疹などという病気が初耳である。発疹は痒みを引き起こすものとの先入観があり、痛みと結び付けて考えることなどできなかったのである。

それはともかくこの帯状疱疹、ヘルペスなんとかという水疱瘡のウイルスが原因で、屋久島では「タン」というと教えられた。意外なことに屋久島では方言で呼ばれるほどポピュラーな病らしい。

その日はちょうど屋久島シーカヤックスキップクラブの新年会だったので、痛みを押して顔を出した。そこで世話人である志戸子の中馬さんから、「タンは、発疹が身体を一周

回ると死ぬって言うがねえ。」と聞かされた。この発疹、身体の一部を帯状に拡がっていく。私の場合は既に右胸部半身をまわり、左半身へと勢力を広げつつあるように思われた。これはヤバイ!と思いきや、医者の話では、帯状疱疹の発疹は身体の半身だけにでるといふことなので、一周回って死ぬということは一応ないらしい。屋久島ではそれほど恐ろしい病気として、語り伝えられているのだ。

別の日、宮之浦の牧瀬一郎君にタン

内、「大谷山のタニカズラ ウラモト切レバ ウラカエル ホーホーホー」(原)、「天竺の七、五鍛冶 打ちたる剣は名剣 それで七谷、八谷はいわたるタンカズラ 元刺し切れば 元切れる うら刺し切れば うら枯れる それで朝草 それで朝草 それで朝草」(春牧)などがあるが、いずれも、からみついた病のカズラを断ち切るといった内容である。大抵は直る(原)、1日1回の《呪い》で4〜5日で直る(春牧)と、《呪い》は良く効くようであるが、誰でもできるというわけではなく、正式に譲り受けた《呪い》でなければ効果はない(尾之間)と言われる。

また安房の真辺さんは、屋久島にはタンカズラがある

に塗って《呪い》をする(春牧)とされている。春牧では、包丁を使わずに、このタンカズラを両手に挟んで合掌しながら呪文を唱えるらしい。

ところで実は私も呪ってもらつた。拙宅の地鎮祭に来て頂いた宮司の大牟田さんが、なんと大阪でタンの《呪い》の指導を受け、免許皆伝の腕前だといふのである。久し振りなので忘れたいと言いつつも、「大阪山ノ サネカズラ ネタチキレバ モトタチキレル」と呪文を唱えながら、包丁を十字に患部にあて、ハーツ、ハーツ、ハーツと気合を入れて息を吹きかけた《呪い》をやってくれた。おかげでこの日を境に快方へ向かったのは言うまでもない。

(市川)

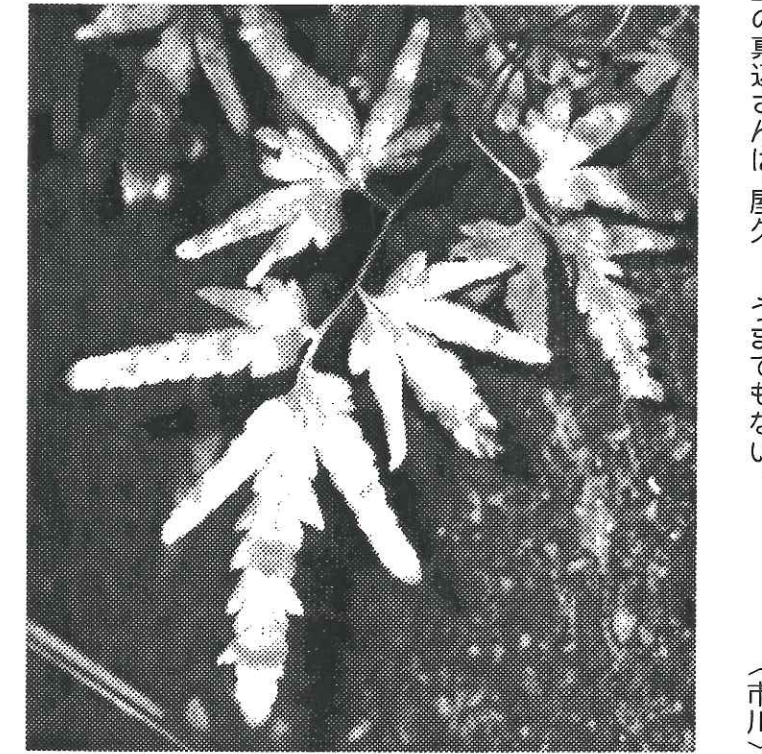


タンに蝕まれた背中

「患部に包丁をあてがい、呪文を唱えながら息を吹きかける。」というのが一般的なスタイルで、朝早い方が効き目がある(湯泊、平内、尾之間)とも言われている。

《呪い》の言葉は、「ヒガシヤマトオカズラ ネヲキツテ カラス ウラヲキツテ カラス アミダ オンチン スワカ ナミダブツ」(平

屋久町郷土誌によると、このタンカズラはカニクサというツル状のシダの1種で、焼いて粉末にしてつけるとよい(平野)、水で洗って塩で揉み、患部



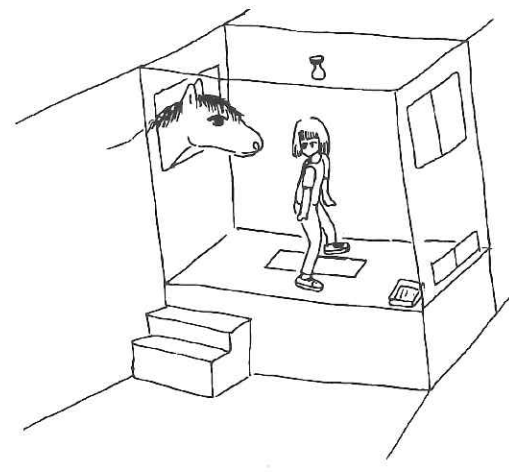
カニクサ *Lygodium japonicum*

私は屋久島出身の者です。前号の川鍋さんのトイレの話を読んで、私から是非皆さんに紹介したいトイレがあるの思い出しましたのでお話しします。

そのトイレは私が中学生の頃、友人の家で借りたトイレの事です。トイレ自体の形状はごく一般的なのですが、(屋久島では...)そこで体験した事が私にとって感動でした。私の中学生の頃は、学校も家庭もほとんどがいわゆる「ぼつとんトイレ」でした。このトイレも、ごめん風呂みたいな槽の上に敷板が敷いてあり、用を足す部分だけを長方形にくりぬいて置いているだけのシンプルな造りで、屋久島ではポピュラーなものだったと記憶しています。

形状もさることながら、このトイレの一味違う所は、家畜である馬とひとときを過ごす所なのです。トイレを借りる度に馬のお尻がどアツプで目の前に迫っていたり、首を出して不思議そうにこっちを覗いていたり、入る度にははら下キナのです。特にびっくりしたのは、用を足している最中に窓から首を出して私の様子をじっと見ていた時です。鼻先まで三十センチの距離に迫っていました。円な瞳で何を考えて見ていたのか...

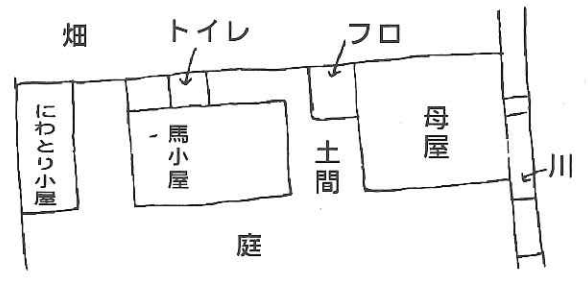
は、馬と同時にしつこくして来た事があります。(これって恥ずかしい事かでしょうか...)馬は一分近くおしつこをするのではなかったかと思えます。体が大きいこともありませんが、いつになったらおしつこが終わるのかとても不思議に感じた記憶があります。それに、近くで聞く音もすごい迫力です。まさに滝のようです。皆さんも機会があったら是非、馬のおしつこを聞いてみてください。



今ではもう馬が田や畑に出ている姿を見る事が出来ません。ほんの十年前までは稲作に馬や牛は欠かせないものでした。更に昔は、屋久杉の切出しや、島内の荷物の運搬などあらゆる所で馬は活躍していたそうです。屋久島の生活には切っても切り放せないものだったと言う話を祖父や祖母によく聞きます。

家畜との生活があたりまえだったこの頃の生活では、一見変な造りのこのトイレもとても自然だったんだと、改めて思いました。

海で馬を水浴びさせたり、子供たちを乗せて遊んだりしていた「馬のおじちゃん」がとても懐かしいです。一日の仕事を終え、夕日をバックに馬に乗って帰っていくあの姿はとてつよくよかったです。屋久島の景色にとてもマッチしていたと思います。



屋久島の農家の平面図

TAMAN NEGARA 速報

去る五月一日より五泊六日で、マレーシアのタマンネガラ国立公園へ行ってきました。今回はJATA(日本旅行業協会)のエコツアー研修への参加ということで、マレーシア政府観光局の全面的な支援もあり、快適かつ贅沢なツアーを味わうことができました。

タマンネガラは半島部マレーシアのほぼ中央に位置する四三三三km(屋久島の八倍以上)の広大な国立公園です。半島部最高峰のタハン山(二一八七m)を有するものの、国立公園利用の中心地であるクアラタハン

は、半島中央部にも関わらず標高は七五m程しかなく、見所の中心は熱帯雨林のジャングルとなります。マレー半島は一億三千万年から海に沈むことなくあり続けた世界で最も古い陸地のひとつだと言われており、タマンネガラも世界で最も古い熱帯雨林と形容されることがあります。

数あるプンブンの中でも、ベストプンブンと言われているのが、プンブンクンバンです。今回は無理をいって一晩だけ別行動でこのプンブンクンバンに泊りに行きました。ここは天然の岩塩がでる

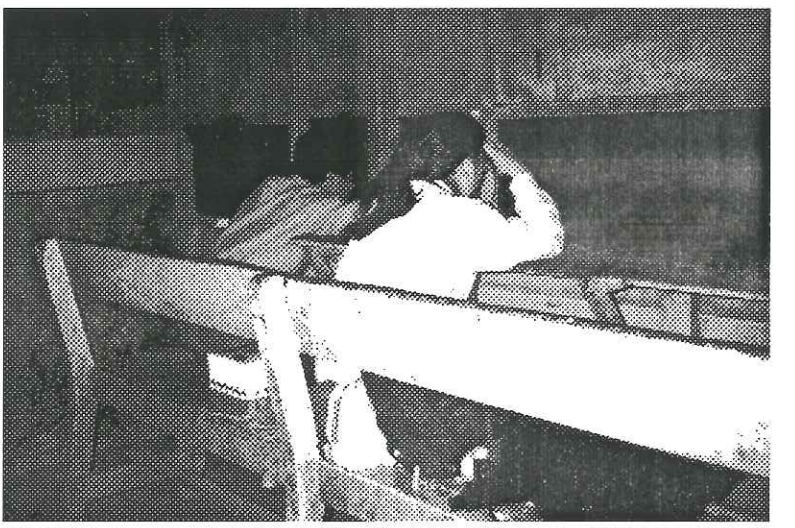
まっぴるような感じがしました。こののキャノピーウォークウェイは、高さは四〇m、全長四五〇mもある世界最長のもので、揺れ具合も申し分なく、この公園の目玉となっています。

この見所はなんといっても野生動物との出会いです。昼間のジャングルウォークでもしばしばテナガザルの大きな鳴き声が聞かれました。各地にプンブンと呼ばれる動物観察小屋が建てられていて、野生のゾウやサイ、バクなどの大型動物を見ることができるといわれています。リゾートにも人慣れたオナガザルやノブタ、サンバー鹿がやってきて、間近で見られるのですが、リゾート周辺は開発の影響か、森も動物もなんとなく荒んだ感じで、ボルネオのダナンパレリのような野生は感じませんでした。ただリゾートのすぐ裏にプンブンタハンがあり、夜間ここからサンバーやノブタを手軽に観察できるなど、おすすめスポットとなっています。

とここで、夜にゾウがこの岩塩を舐めるのを観察できるというのがふれこみです。船着場にたむろしている現地の若者達にプンブンクンバンへ行くというと、みな口を揃えてガジャ、ガジャと言います。ガジャとはマレー語でゾウのことです。我々もガジャ、ガジャ言いながらプンブンクンバンへむかいました。

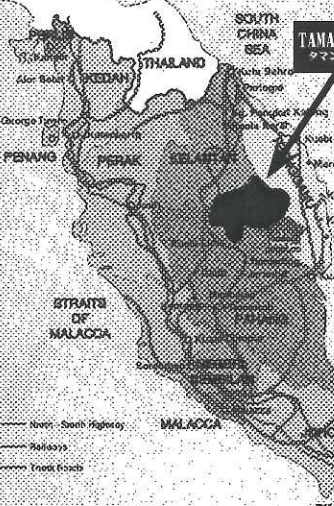
プンブンクンバンは三階建てほどの高さの高床式の小屋で、八畳ほどの広さです。岩塩の出る草地を見下ろす壁に細長い窓があり、長椅子に腰掛けて動物が出てくるのを待ちます。二段ベットが三組あるので、交代で見張を立てて仮眠をとることが出来ます。前に中国人があまり騒がしかったので、出てきたゾウが怒って小屋を揺すったという逸話があるほど、目指す草地は目と鼻の先にあり、息をするのもはばかられるほど緊張してゾウの登場を待ちました。

何も現れることなく夜は深くなっていき、うつらうつらしながら窓辺で腰掛けていると、ちょうど午前四時半、突然草地の方から、グチャ、グチャというぬかるみを踏む音が響いてきました。はっと目を覚まして耳を澄ますと、更に草のガサガサいう音がし、次にはバキッと木の折れるような音がしました。しかし空は曇り、星もない闇夜です。いくら目を凝らしてみても何も見えません。仲間を起こして、思い切った懐中電灯で草地を照らしてみることになりました。生睡を飲み込みながら、せーのでパッと明かりをつけたところ、木の葉がむなしく風に揺れているのが見えるだけでした。その夜の最大のイベントは、こうしてあつけない空振りに終わり、夜は白々と明けてしまいました。あれはきつと、小出しに、期待を持たせるのが



かくしてプンブンクンバンの長い夜はふけていった

タマンネガラの森もボルネオと同じようにフタバガキを中心とする熱帯雨林なのですが、ボルネオと比較すると、メンガリスのような八〇mを越す超高木がないせいか、全体としてこじんまりまと



熱帯のジャングルの手強さというものでしょうか。

今回のツアーは、丘登り、洞窟めぐり、急流ボート、オランアスリの集落探訪、ナイトウォーク、キャノピーウォークと盛りだくさんの内容でした。リゾート中心のメニューであったせいか、快適なかわりにいまち原始性を感じられないまま、もどかしさが残ったのも事実です。

しかし、クアラトレンガンからプンブンクンバンへの道のりの、巨木と獣達の鳴き声は、しびれるような深い深いジャングルの息吹を感じさせるものでした。屋久島の八倍以上もある広大な国立公園です。まだまだ奥は深いと、熱帯ジャングルへの思いを新たに帰路につきまいた。そのうちタマンネガラツアーもやりたいと思います。

ボルネオ・エコツアー開催のお知らせ

有隣堂カルチャークラブ

熱帯雨林・ボルネオを往く

旅行取組 有隣堂カルチャークラブ
旅行予約 有隣堂カルチャークラブ
有隣堂カルチャークラブ

●開催日: 9年2月27日(木)~3月6日(水) 6泊7日

●参加費: ①ボルネオ島(マレーシア領サバ州)(成田空港集合・解散)
②海では内容の希望により、別れて行動します。
ご希望のコースをご指定の上、お申込みください。
③ダイビング希望(ライセンス取得者) 274,000円
④シュノーケリング(経験不要) 264,000円
(高コースとも、6泊13食代・成田~コタキナバル往復航空を含む全現地移動費・全乗物参加代含む)
*お申込時にご予約金として30,000円をお支払い下さい。

●定員: 20人
●講師: 屋久島野外活動総合センター

赤道直下は魚群の楽園
渦巻くバラクーダ。湧き出すギンガメアジ。ここはダイバー憧れの海。大型の魚との遭遇に大感動し、無数のカラフルな熱帯魚に目を見張る。潮風が涼しい快適な水上コテージでのんびりもよし。

熱帯雨林をキャノピーウォーク
ダナンパレリ。熱帯雨林の保護・調査を目的としたボルネオ有数の保護区。はるか上空に枝葉を広げる高さ60m級のフタバガキ科の木が立ち並び、精緻な植物がその高木をさらに巻き纏う。熱帯雨林はゴージャスだ。この高木の樹冠をつなぐ研究・観察用つり橋。ここで、地上からは伺い知れない樹幹部の生態を観察。広々として立派な熱帯雨林に宿泊し、熱帯雨林をじっくりと観察。

オラウータン
ボルネオ特有の野生動物

マレー語で「オラン」は人、「ウータン」は森。つまり森の人。訪問するセピロック・オランウータン保護区は世界最大規模の保護区。ここでは母親を亡くしたオランウータンの子供たちが野生復帰のトレーニング中。朝食時間を訪問します。可愛い子供たちが森から出沒する。保護区を出て、キナバタン川にゆつくりと船を進める。両岸の木々にはテングザル・プタオザル・カニクイザル等々。彼らの動向も興味深い。

問い合わせ: 有隣堂 生涯学習部
TEL 045-825-5539

CALENDAR

Y-NAC文献目録1996.1~1996.6.

1月

15日 市川、屋久町町内一周駅伝大会に出場
21日 小原、横浜の有隣堂生涯学習部にて屋久島とボルネオのツアー説明会
22日 小原、箱根の御南原生林視察

2月

14~22日 松本、小原 ボルネオ ムル国立公園で研修。他に滝田よしひろ、中島麻裕が参加。
22~28日 有隣堂カルチャークラブ「熱帯雨林・ボルネオを往く」催行。松本、小原が講師をつとめる。

3月

1日 松本、日本旅行業協会(JATA)主催のエコツアーシンポジウムにパネリストとして参加
5日 市川、北海道開発局主催のシンポジウムで、屋久島のエコツアーについて基調講演

4月

6日 市川長男洸介、安房小学校に入学。小原次女萌衣、栗生小学校に入学
13日 渡辺、研修生としてY-NAC入り
17日 屋久島世界遺産センターオープン
21日 山開き神事。ヤクスギランドにて地元向けに「安房洲カヌー体験会」を主催

5月

11日~15日 市川、マレーシア タマンネガラ国立公園で研修
20日~22日 屋久島でJATAエコツアー研修。Y-NACがガイドをつとめる。

6月

17日~29日 小原、オレゴン州で研修兼家族旅行
28日 新市川邸竣工

編集後記

えー、そのー、大変ながらくお待たせいたしました。中にはY-通がなかなか来ないのでY-NACが潰れたのではと思われた人もいたのではないのでしょうか。大変申し訳ありませんでした。いやー、でも何とか発行までこぎ着けてよかった。(た)

いや、ごもっとも。返す言葉もございません。次号こそはきつと、必ずおそらく、たぶん。(さ)

オレゴンの温帯雨林は、ヤクスギの森にそっくりだ。ダグラスファーの巨木の森に、林床も樹上も圧倒的に元気な蘚苔類があふればかり。北西アメリカ太平洋岸の森、いいぞ〜、と思っていたら、アラスカの写真家、星野道夫さんがカムチャツカで亡くなってしまった。なんとということだ。あまりにも惜しすぎる。(ひ)

書籍

★BEPAL OUTING MOOK「自然の学校」小学館 ¥1400.
P60~63「世界遺産の森をめぐるエコツアー
~屋久島野外活動総合センター」
誠実で研究熱心なY-NACというイメージで、有隣堂ツアーの風景をルポしてくれている。が、これだとのんきに水遊びをしたい人はみんな西表の中神さんのところに行ってしまうかもなあ。この本は、環境教育フォーラムの身内本ともいってしまうとまずいかも知れないが、まじめな環境教育系や精神世界系からのんきなおじさん系まで、自然と遊ぶための案内者を各種混沌と取り上げており(いろいろな人がいるもんである)、一般アウトドア系がまったく登場しないところが珍しい。

主な取材記事

★ビジネスジャンプ 1996年NO.7巻末
「日本仕事塾 第2回 国立公園管理官」
レンジャーの佐山さんをルポしているのかと思いきや、リポーターの太ったヒゲの人の写真ばかり。Y-NACも最後にちらりと登場する。

★自由時間 NO.126 1996.6.6. P43~47
「屋久島、種子島 島で遊ぶ」
一般的な屋久島紹介記事。松本が登場する。しかしこの雑誌、一体どういう人が読むのだろう。

★ビィオール NO.54 1996.5.
「エコツーリズムIN屋久島」
札幌で発行されている、精神世界系の環境雑誌。なぜかY-NACが取材されており、こういう場に不馴れな市川が、肩身の狭そうな顔で登場している。

★オスマガジン 1996.7.22.増刊号P6~10
「最古の自然が残る屋久島に感激」
記事が薄っぺらなのは別にどうでもいいが、問題はカラー見開きに、ウィルソン株に記事のライターとおぼしき女性が乗っている写真を使っていることだ。本文中で「あとからわかったことだが、ウィルソン株に上るのはじつは御法度。」といっている。しかしウィルソン株のかたわらには「登らないように」という旨のよく目立つ立札があり、取材者がこれを見落とすとは思えない。仮に本当に見落としていたのだとしても、記事を製作している段階でそのことに気が付いているのなら、この写真を使うべきではないという判断は出来たはず。つまりウィルソン株よりも誌面を大事にしたということだ。キャプションでことわれば済むというものではない。自然に対するマスコミの姿勢としては許されないことである。このような記事にY-NACの名を載せてくれる必要はなかった。

執筆記事

★生命の島 第38号 1996年6月 P16~17
「海で出会った凄い奴ら」 松本毅
海の短いビデオクリップ集を見るようなショートオムニバス。末尾の能書きは、とってしまった方がおしゃれだと思う。

★アウトドア NO.160 1996.6. P11
TOPICS「屋久島に世界遺産センターが完成」 小原比呂志
“ひとごとのように気のない文章”と批評されたが、確かに5月の連休に書いたからなあ。それよりも山尾三省さんの連載を呼んでください。(小原)



Y-NAC通信 第4号
ファイナックつうしん 第4号
発行 (有)屋久島野外活動総合センター
住所 〒891-42鹿児島県熊毛郡上屋久町
電話 09974-2-0944